
ポケモンヒストリー

名無し

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモンヒストリー

【Nコード】

N6645Z

【作者名】

名無し

【あらすじ】

さまざまな地方を巡り歩いてきたサトシは、その実力を買われ、なんとカントー最強のトレーナー・ワタルへの挑戦権を得る！しかし、世界は広がった……。もっと強くなりたいと闘志を燃やすサトシは、初心に戻るため再び各地方への旅を開始する！

熱いバトル、さまざまな陰謀、そして恋……。
はたして、彼に待ち受けるものとは！？

キャラ紹介

サトシ 17歳

「気合い」と「根性」でできた若きポケモントレーナー。相棒はずっとピカチュウ。そして夢もずつとポケモンマスター。

そんな彼も成長し、トレーナーとしての実力は今やカントーでは1、2を争う程に。しかし、調子に乗りやすい所や無鉄砲さなどは変わらず、精神面の成長はあまり見られない……………と思いきや、可愛い女の子を前にするとたま〜に赤面することも。でも周りとは比べるにはやはりまだまだ鈍感。

ハルカ 17歳

「ホウエンの舞姫」の二つ名を持つ。コーディネーターとしての実力はもはやトップクラス。

当然外見も成長し、だんだん「可愛い」から「綺麗」になってきた。何とファンクラブまでできたとか。内面的にもすっかり大人……………になった訳ではなく、同年代のヒカリや弟のマサトにまでいいようにからかわれるなど、「大人の女性」までの道のりはまだまだ遠い（笑）。

最近はコンテストどころか、周りを完全シャットアウトして猛特訓しているらしい。

タケシ 21歳

ポケモンブリーダーにしてニビシティジムリーダー。その幅広い知識でサトシ達をかげながら支える。皆のお兄さんの存在。しかし「

お姉さああああん！！！」なのは今でも変わらない……。

カスミ 19歳

自称「世界の美少女水ポケモンマスター（長つ）」。水ポケモンをこよなく愛するハナダシティジムリーダー。軽そつなイメージとは裏腹にジムリーダーとしては誰もが一目置く存在。

サトシだけでなく、ハルカやヒカリにもよく相談を受けるなど皆に頼られている。タケシがお兄さんなら、彼女は皆のお姉さん役と言ったところ（？）

マサト 14歳

ハルカの実弟。相変わらず生意気だが、彼ももう立派なトレーナーに。尊敬する父の様なジムリーダーになるべく、今は修行のため各地方へ旅に出ている。

姉であるハルカのことは気にかけていない様に見せてても実はお姉ちゃん子だったり（多分）。

ヒカリ 17歳

今をときめく「シンオウの妖精」。その人気はもはやアイドル並。同じコーディネーターであるハルカのことは良き友人兼好敵手として今でも慕っている。

超おしゃれ好きで人懐こく、今で言う「守つてやりてえ」タイプ。でもカスミと一緒にサトシやハルカをからかうなど、以外と人を扱うのが上手いところも（良い意味だよ？）。

同じくライバルであるノゾミと共にトップコーディネーターを目指し精進中。

キャラ紹介（後書き）

若干アニメと設定が違つかもしれません。ご了承ください……。

旅立ちと始まり（前書き）

作者はサトハル、シユウハルがすぎです。
苦手な方はご注意を。

旅立ちと始まり

夜……

とある地方のとある街の高いビル……

「……………」

その屋上から街を見下ろす人物が一人……

黒いローブを纏い、表情も頭からすっぽりかぶったフードで見えない。

まさしく……漆黒……

夜空に浮かぶ月の光が無ければ、その姿は夜の闇に完全に紛れていただろう……

「……………」

バタバタ……

夜風がローブを撫でる……

その漆黒の人物はただただ、摩天楼の上から眼下に広がる街を見下ろしていた……

サトシ「じゃ、行ってきますー！」
ハナコ「まったく忙しいわね……。もう少しゆっくりしていけばいいのに……………」
サトシ「そんなじつとしてらんないよ！俺はもっと……もっと強くなるんだー！」
ピカチュウ「ピカチュウッー！」

帽子の少年……………サトシの肩に乗るピカチュウが「同じくー！」と言わんばかりに鳴く。

ハナコ「ホント、あんたはソレばかりね……………」
サトシ「何だよ母さん。もっと明るく見送ってくれよ……。愛しい息子の決意の朝なんだぜ？」

サトシが少し冗談気味に言う。
マサラタウンの一般家庭のごく普通の光景。

ハナコ「ハイハイ。じゃあ、気をつけて行ってらっしゃい。身体は大事にね？」
サトシ「おう！行ってきますー！」

遠ざかっていく息子の背中を見る……………もう何度こうやって送ったことが……………
でももうあの子も17……………ずいぶんたくましくなったわね……………
……………
ハナコはその背中が点に見えるほど小さくなるまで見つめ、やがて家に入っていった。

サトシ「うん。ちょっと早すぎたかなあ……………」
ピカチュウ「ピカ〜……………」

ハナダシティの駅の西口。

サトシはある人物達と待ち合わせしていた。

時計を見る。待ち合わせ時間15分前。サトシにしては早い。

しっかし変わったなあハナダシティも……………」

いわゆる高層化。もともとそんなに田舎町というわけではなかったが、10歳のころ自分が初めて訪れた時と比べれば、高層ビルやらなにやらが多くなっていた。

サトシ「この駅も昔は小さ……………」あつ！お〜いカスミい〜！！」

向こうからオレンジ色の髪の少女が歩いてくる。

カスミ「ちょっと！そんな大きな声出さないでよ！恥ずかしいじゃない！」

サトシ「いやだって、こんな広いところこれくらいじゃなきゃ聞こえないだろ？……………」いやあ〜でも久しぶりだなあカスミ！ちょっとは女らしくなったんじゃね？」

カスミ「へえ〜？あんたも少しは成長したじゃない。このアタシの魅力にちよつとは気がついたなんて。」

サトシ「まあ、だって元がアレじゃあさ……………」ってウソウソ、ジョーダン……………」ソレ当たったら怪我……………」

カスミが近くの小石を拾おうとしたので、サトシは続きを言うのをやめた。

カスミ「ったく……………ん？あれタケシじゃない？」

サトシ「あ、ホントだ！お〜いタケシイイ！！こっちだこっち！！」

タケシ「おお二人とも！久しぶりだなあ！」

細目の男。タケシの登場だ。

サトシ「久しぶりだなタケシ！どうだ？彼女できたか？」

冗談気味に言うサトシ……………が

タケシ「サ、サササササトシが……………彼女って……………言った……………！？」

サトシ「何だよ、そんなびつくりすんなよ！冗談だつて！」

タケシ「サトシからその部類の冗談が出るとはな……………。この六年あまりの月日は伊達じゃないってことか……………」

カスミ「アタシもちよ〜とだけビックリしたわ。でも行動が突飛なところは変わらないわね……………」

タケシ「だな。いきなり「初心に戻りたいから最初のメンバーで旅しよう」だなんて…………。まったく人のこと考えてるのかよ。」

サトシ「ハハハ。でも二人とも来てくれたじゃん。やっぱ仲間だよなあ〜俺たち！」

サトシは数日前、かのカントー最強のトレーナー、ドラゴン使いのワタルとバトルした。

何故そんな変則マッチが実現したかと言うと、

カントーリーグ協会がサトシの有望性を買ひ、何とポケモンリーグ、四天王リーグともにすっ飛ばし、特別にワタルへの挑戦権を与えたのだった。

だが結果は……………完敗。

何とか三体を戦闘不能に追い込んだものの……、最後はワタルの
カイリユ―相手に手も足も出ず、ストレート負け。
その圧倒的な力の差にサトシは啞然としたが、

ワタル「君の再挑戦を心から待っている……………」

その言葉でサトシは吹っ切れた。

……………世界は広い……………俺はまだまだ強くなれる……………

……………！！

というわけで初心に戻り、一番最初に旅をしたメンバーで旅をしよ
うというのだ。

サトシ「まっ！回るのはカントーだけだからさ！それまでの間つき
あってくれよ！」

ピカチュウ「ピッカチュウ〜！」

ピカチュウが「ごめんね〜」と言わんばかりに可愛らしく鳴く。

カスミ「しょうがないわね。可愛いピカチュウに免じて、つきあっ
てやるわ！」

タケシ「まあ俺たちにとっても、ためになるかもしれないしな。ブ
リーダー修行の旅、再開だ！」

サトシ「そこなくちゃ！よろしくな二人とも！！」

バンバン！と二人の肩を叩くサトシ。

カスミ「っタ！もうちょっと加減しなさいよ〜！……………で、カント
ー回った後はどうすんの？」

サトシ「う〜ん、まだ決めてない。ホウエンにでも行ってみようか
なあ〜……………」

カスミ「あら？ジヨウトすっ飛ばしてハウエンなんて……………喜ぶわよ？愛しのハルカア。」

さっきの仕返しと言わんばかりにカスミが冗談気味に言う。

サトシ「いつ、愛しっ……………！ちげー！よ！別に会いに行くだけで旅に誘おうとした訳じゃ……………」

カスミ「ほお〜う、会いに行くつもりだったんだあ。」

サトシ「だ、だから違っ……………！ちよつと世話になったから顔出しところと思っただけだって！！」

カスミ「そーやって必死になってんのが怪しいのよ。ってか顔真っ赤よあ〜？」

サトシはもうしどろもどろ。

でもこーいう冗談が通じる様になったんだからすごい成長よね。

サトシ「ツツツツ！ああ〜もうっ！さっさと行くぞ！？」

ズカズカと進んで行くサトシ。

カスミ「ちよつ、行くってどこ行くのよ！」

タケシ「逃げたか。」

カスミ「も〜、面白かったのに……………」

タケシ「……………そっいうお前はどうかんだ？」

と今度は、タケシがカスミ同様、にやけながら言う……………
……………が

カスミ「フフフ。ヒ・ミ・ツ！」

タケシ「なっ……………何い！？」

思いがけないカスミの返答に驚くタケシ。
じよ、冗談のつもりで言ったのに……………

カスミ「ハイハイ、この話はここまで。さっ、サトシ追いかけてま
しょ？このままじゃアイツ迷子になるから。」

そう言つてサトシを追いかけるカスミ。
タケシはそんな彼女の背を見る……………

タケシ「……………こりゃ、俺たちもつかうかしてられないな。サト
シよ。」

静かに呟くタケシであった。

カントー地方。どこかの街のビルの地下……………

「……………状況は？」

低い。地獄の底から響いてくるかの様な声。

部下？「はっ！先程、監視の者から入った連絡によりますと、ター

ゲットは今朝マサラタウンを出発。現在はハナダシティ駅にてトリーナーと思われる仲間二名と合流したとの事です!」

部下と思われる男が軍隊じみた口調で報告を上げる。

???「仲間というのは?」

部下1「はっ!ニビシティジムリーダー・タケシ、ハナダシティジムリーダー・カスミと思われませう!」

???「なるほど。昔のメンツと言うわけか……。監視を続ける。動くのは奴らに隙ができた時だ。その際、他の者は適当に追っ払っておけ。目的はあくまでサトシ君のみだからな。」

部下1「はっ!では引き続き監視の伝令を送ります!」

???「よし。お前はもう下がれ。次の報告を。」

するともう一人の部下が前へ出て、先程の部下と同様に軍隊口調で、

部下2「はっ!解析は現在35%完了。このペースでいきますと10日後には完了する予定です。」

???「思ったよりかかっているな。急げ。」

部下2「はっ!すぐに伝令を!」

ボタン……………部下達が扉を閉める音……………

もう部屋にはボスと思われる男一人しかいない。

……………少し手間取ったものの、こちらは近い内にメドがつくだろう……………

……………後は……………

?????「……………『ワダシニ……………か……………」

同時にサトシの名も自動的に広まって、今ではちょっとした有名人だ。

タケシ「そろそろポケモンセンターに行っただ方が良いだろう。ポケモン達も疲れてる。」

サトシ「ああ、そうだな。」

タمامシシティに着いたサトシ達はまっすぐポケモンセンターへ直行、ポケモン達をあずけた。

タケシ「ジョーイーさあああ……あでっ！ででで！？」

カスミ「アンタは変わってないわよねほんっつと！」

すぐにカスミに耳を引っ張られるタケシ……

タケシ「ちょっ……まだ名前呼んだだけ……！」

懐かしいなあ……

などとサトシは呆れながらそれを見ていたが、

ジョーイ「マサラタウンのサトシさん。フタバタウンのヒカリさんから伝言を預かっています。ソノオタウンのポケモンセンターに連絡が欲しいそうです。」

サトシ「ヒカリが？はい。わかりました。」

カスミ「ヒカリ？前にシンオウと一緒に旅してたっていう子？」

またもやカスミがニヤニヤしながら言う。

サトシ「ま……たそれだよ……。ヒカリは友達！仲間だよ！」

カスミ「じゃあハルカは？」

サトシ「ハルカも同じだ！！」と、とにかく、ヒカリに電話しないと
……………」

そう言っつてTV電話のもとへ向かうサトシ。

カスミ「ふう〜ん……………（ニヤリ）」

カスミは見逃さなかった。

ハルカの事を聞かれた時と、ヒカリの事を聞かれた時の、サトシの
微妙な反応の差を……………

旅立ちと始まり（後書き）

初めての投稿です！

どこまでやれるかわかりませんが頑張ります。

嵐の前の静けさ？

タマムシシティ・ポケモンセンター。

午後5時。

サトシ「よおヒカリ！久しぶりだなあ！」

ヒカリ「サトシ久しぶり〜！元気してた？」

サトシはジョーイからの伝言を受け、TV電話でヒカリに電話していた。

ヒカリ「タケシも久しぶりね！……あ！もしかしてあなたがカスミさん！？わたしヒカリです！よろしくね！」

カスミ「よ、よろしく！」

ヒカリの勢いに珍しくカスミは押され気味だ。

ヒカリ「でもカスミさんって噂どおり美人ねえ〜！しかもジムリーダーだなんて！女として憧れちゃう！」

その言葉にカスミはもうニヤニヤ。

カスミ「そ、それほどでもあ〜！ヒカリっていい子じゃないサトシ〜！」

サトシ「すぐ調子乗るのはどっちだよ……」

カスミ「何か言った？」

サトシ「や、何も〜。ところでヒカリ、俺に何か用か？」

サトシは今の空気が面倒くさいのでさっさと本題に入った。

ヒカリ「あ！そうそう！最近ハルカと連絡取れないんだけど、サトシ何か知ってる？」

サトシ「え？ハルカ？いや、特に何も聞いてないけど……えっ、連絡つかないのか？」

ヒカリ「そうなのよ。私が連絡したのは三日前くらいんだけど、それからいくら電話かけても出ないのよ。」

サトシ「ふ〜ん……。カスミ何か聞いてるか？」

カスミ「いいえ、別に何も聞いてないけど……」

サトシ「タケシは？」

タケシ「いや、俺も別に……」

サトシ「……まっ、あいつのことだ。ケータイの電源消しっぱとかなんじゃねえの？それかどっかに落としてるとか。」

カスミ「サトシの中のハルカはよっぽどドジなイメージのね……」

ヒカリ「そっか……。わかったわ。とりあえずまた連絡してみる。突然ごめんね。」

ハルカを心配してか、さっきまでの勢いがすっかり無くなってしまったヒカリ。

さすがにサトシもすぐにフォローする。

サトシ「ま、まあそんな心配すんなって。後で俺がマサトあたりに電話して聞いてみるから。」

ヒカリ「ホント！？ありがとうサトシ！わたし、よく考えてみたらハルカの身内の番号知らないから……。でも良かったわ！何かわかったら教えてね！」

サトシ「ああ、すぐ連絡するよ。」

ペア……。と、突然明るくなるヒカリ。

ホント表情豊かだよなヒカリは……

お前は笑顔が一番……………って！何考えてんだ俺！？
ともあれとりあえず元気になったヒカリを見て安心したサトシは、
しばらく雑談を楽しんだ。

ピッ……………TV電話の電源を切る。

ヒカリ「…ふう……………」

ノゾミ「どうだった？」

ヒカリ「うん……………。サトシ達も何も聞いてないって……………。」
ノゾミ「そう……………。」

さっき電話では元気に話していたものの、ヒカリはやはりハルカが
心配だった。話している間は気がまぎれていたのだろう。

ノゾミ「どうしたんだろうね？最近コンテストにも全然出てないみ
たいだし……………」
ヒカリ「うん……………」

ハルカが最近コンテストに出ていない事は、サトシには言わなかつ
た。

そこまでは……………何だか言いづらかったからだ。

……………わたし……………ミクリカップ以来、ハルカに一度も勝ったことな
いの……………

でも……………ハルカがいなくなれば……………楽になる……………？
前に見たコーディネーターの雑誌にそんな事が書いてあった。

「ホウエンの舞姫、戦線離脱！？シンオウの妖精、障害が無くなり
一歩リードか!？」

勝手なこと書かないでよ……………
だからこそ……………越えたいのに……………

ノゾミ「ハルカにミクリカップのリベンジしたいんだけどな……………

…
ヒカリ「うん……………」

……………でも、大丈夫だよ。サトシもマサト君に聞いてくれるって言ってたし。きっと何か事情があるんだよね。
ヒカリは無理やり気分を切り替えた。

ヒカリ「ハルカなら大丈夫！きっと何か事情があるのよ！」

ノゾミはいきなりヒカリの勢いが戻ったので多少びっくりしたが、すぐに不敵に笑い返した。

ノゾミ「そうだね。それにいつまでも引きずってたら、明日のコンテストにも影響が出る。」

ヒカリ「うん！明日こそ負けないからねノゾミ！」

ノゾミ「その息だよヒカリ。でもまさかアンタに励まされるなんてねえ。」

ヒカリ「ちょっとソレどういう意味よ!??」

ソノオタウンのポケモンセンターに、二人の元気な声が響いた。

午後9時30分。

タمامシシテイ・タمامシ美術館

美術館付近……………

????「目標に到達。指示を。」

ピピガガッ……………通信機器の音……………

????「よし、では各管理コンピューターにハッキング。完了次第報告せよ。」

????「了解。では、ハッキングを開始します。」

ガチャガチャと色々な機器をリユックから取り出す。と同時に、ものすごいスピードでそれら进行操作し始める。

風もない静かな夜……………嵐の前の静けさというものだろうか……………

サトシ「修行?」

マサト「うん。3ヶ月くらい前だったかな?」自分とポケモンの力を高めるために修行するから、しばらく連絡取れなくなる「っていきなり電話きてさ。まあサトシがよくやる山籠もりみたいなものかな?」

サトシ「にしてもずいぶん長いな……………」

サトシはさつきヒカリに言った通り、ハルカの事を聞くためマサトに連絡していた。

マサトは今はポケモントレーナーとして各地方をまわっており、今はジョウトにいるらしい。

マサト「それでしばらくコンテストにも出れないって言ってたけど、まあそういう事だから。うちの姉が心配かけたねえ。」

相変わらず皮肉いっぱいにマサトは言う。

サトシ「ハハハ。まあ別にそんな心配はしてなかったけどな！」

マサト「あらら、お姉ちゃんかわいそうにい……」

マサトは何やらニヤニヤしている。

サトシ「ま、まあちょっとは心配したかなあ、ハハ……。じゃあありがとなマサト！ジム戦がんばれよ！」

と言いつつ内心では結構心配してたサトシ。
これでひとまず安心だな。

マサト「うん！サトシになんてすぐ追いつくからね！」
サトシ「ったく成長しても生意気い……。じゃなっ！」

ピッ！携帯の電源を切る。

タケシ「何かわかったか？」

サトシ「ああ、何か修行だっさ。」

カスミ「修行？」

サトシはさっきマサトから聞いた事をタケシ達にも話した。

タケシ「コンテストにも出ないで特訓だなんて……………随分な力の入れようだな……………」
カスミ「しかも完全にまわりシャットアウトして3ヶ月も……………どっかの誰かさんに似て行動が突飛ね。」

カスミがサトシを横目で見ながらわざとらしく言う。

サトシ「おいソレ俺に言ってるのか？」

カスミ「他に誰がいんのよ。」

カスミの即答にふてくされた様な顔をするサトシ……………が
……………へっ。いつちよ前に張り切りやがって……………

サトシ「っっおー！ーし！！俺も負けてらんねええええええ！！ちよ
っつと外行ってくる！！」

カスミ「えっ！？外って何、ドコ！？」

サトシ「修行だよ修行！大丈夫すぐ帰ってくるから！じゃなっ！」

そう言っつてサトシはポケモンセンターから飛び出して行ってしまっ
た……………。

カスミ「ちよっつ……………！ヒカリに連絡するんじゃない……………もっ行っ
ちよっつたし……………」
タケシ「ハハハ……………。まあヒカリには俺達で連絡しておこう。」
カスミ「そうね……………にしてもホンツツツト似た者同士……………
……………」

夜のタマムシシティに消えていった少年の背中にため息をつくカス

ニであつた……。

午前1時

タマムシシテイ……………どこかのビルの屋上……………

「……………」

月も星も雲により身を潜めた夜の闇は、やはり漆黒のロープを纏つたその姿を完全に呑み込んでいた……………
眼下に見下ろすはタマムシ美術館。
そして……………

サトシ「ふう〜。けっこう遅くなっちゃまったなあ。散歩がてらそろそろ帰るかピカチュウ」
ピカチュウ「ピツカツチュウ！」

肩に黄色いポケモンを乗せて歩く少年……………

「……………」

闇に紛れた「闇」は、ただただその少年を見つめていた……………

タマムシ美術館付近。

「ハッキング及び突入準備完了。いつでもいけます。」
「よし、ここからもよく見える。」

先ほど出されていた電子機器の数々はすでに片付けられている。

「では作戦及び目標の再確認を……………」
「リーダー。それは必要ありません。時間の無駄です。」

リーダーと呼ばれた男の言葉を遮り、同時に上司に対しては有り得ないであろう言葉を放つ……………が

「リーダー？」「フツ……………そうだったな。お前は何よりも無駄を嫌うエンジニア。そして……………」

????「どんな任務も無駄なく達成してみせます。」

「またもやリーダーの言葉を遮る。」

「リーダー?」「頼もしいな。では、コードネーム『ルカ』……………」

瞬間、雲が割れ、月光がさす。

「リーダー?」「……………突入せよ。」
「ルカ「了解。」」

ピッ……………」

「リーダー?」「ボス、『ルカ』が目標に突入しました。」

「????」「そうか。ご苦労。お前はもう戻れ。」

「リーダー?」「はっ。」

「……………どこかの街のどこかの地下……………」

「……………現在は部下もおらず、部屋にいるのは「ボス」と呼ばれた彼一人だ。……………」

「……………」

「……………『ルカ』に任せておけば、まず間違いなくアレは手に入るだろっ……………」

「……………残る鍵は……………」

「????」……………『シド』。」

シド「はっ。」

「????」『水の民』の搜索を開始しろ。」

シド「はっ。ただちに。」

ピッ……………通信機器を切る。

ガサツ……………机にあった古い文献を手取る。

そこに描かれているのは、

「龍」を思わせる体躯をした生物。

「????」……………必ず……………手に入れる……………」

思わず声に出る。それほどまでに手中に収めたい存在。

コンコン。ドアをノックする音……………」

「????」入れ。」

ガチャ……………ドアが開く。

部下「失礼します。個体02に関する解析について報告いたします。」

男の表情が、期待のソレに変わる。

「????」……………聞こえ。」

部下「……………解析は100%完了。いつでも適合実験に移行可能です。」

「????」……………そうか。」

男の表情が、不敵な笑みに変わる。

????「ただちに開始しろ。」

部下「はっ!」

部下が立ち去ろうとする……………が

????「お前は どう思う。私がこの力を手に入れたとき、私はどのような存在になっていると思う。」

突然の言葉に多少戸惑った部下だったが、すぐに表情を戻し答えた。

部下「……………神……………に等しい存在に。」

男の表情が、凶悪な笑みに変わる。

バタン……………ドアが閉まる音。

今度こそ部下が出て行き、再び部屋には男一人となった。

だが……………その笑みは いまだ浮かべたまま……………

もうすぐ……………もうすぐだ……………

主人の周りの空気が激変したのに気づき、傍らのペルシアンが顔を上げる。

どこかのマフィアのボスのような出で立ち。

その主人の左胸には「R」のバッジ。

そして、もはや狂気とも言える表情で、言い放つ。

サカキ「……………私は……………神となる……………!」

嵐の前の静けさ？（後書き）

サトハル出てくるの結構後になるかも……
けど、必ず出しますんで！

遭遇！バカにされた？

サトシ「ふあゝ…、流石に眠くなってきたな……。」

夜もふけてきたので、サトシはバトルの訓練を切り上げ、ついでに散歩をしながらポケモンセンターへ向かっていた。

サトシ「今何時……げっ、もう1時回ってんじゃん。やりすぎた……。」

流石にこの時間だと肌寒い。散歩をやめ、サトシは身震いしながらポケモンセンターに急ぐ。

サトシ（そっぴやアイツ……一人で修行してるんだっけ。今頃何やってんのかな……って、もう流石に寝てるか。）

歩きながら空をしてみる。月も星も見えない。

……いきなり一人でジョウトに行くって言い出した時は、正直びっくりしたな……。

あの頃は俺だってまだ一人旅なんてしたことなかったのに……
……しかもアイツ女の子だし。ちよっと焦ったっけなあゝ……。

などと考えて歩いている内に大きなタマムシ美術館が見えてきた。

サトシ「美術館か。昔の俺ならあんま気になかなかっただろうけど……、明日にでも寄ってみるかな？」

美術館の前を通りすぎる……と思ったのだが、

サトシ「……………ん？」

ふと見ると、夜の美術館に入口から人が一人入っていくのが見えた。こんな時間に……………てか、まだ開いてたのか美術館。好奇心には勝てず、ついさっきまでポケモンセンターへ向かっていたはずの彼の足は、自然と美術館に向かっていた。

サトシ「……………流石に夜中なだけあってちよいと不気味だな……………」

ホールを見渡す。

シン「……………と静まり返り、人っ子一人いない。」

サトシ「夜の美術館って結構定番のシチュエーションだよな。」

ちよつと肝試し気分です歩を進める。

カッコーン……………コッコーン……………

聞こえるのは自分の足音のみ。

よくわからない絵やら銅像やら、ポケモンの化石みたいのやらが沢山展示してある。

てかこれって不法侵入？いや、だって入口開いてたし……………誰にも見つかってないし……………大丈夫だよな？

全然ダイジョバナイのだが、残念ながら彼の常識の中では大丈夫らしい。

しかし、そんなサトシはふと疑問に思った。

サトシ「……………誰にも……………見つかってない？」

いや……………見つける側の人がない？

ここまで割と色んな場所に行ったが、それまでの間人という人を見

ていない。

サトシ「警備員とかいないのか……………？いや、そんなことないよな……………」

そついや入り口にも見張りとかいなかったな……………見たといつたらさつき入口から入っていった人……………

サトシ「……………！」

そこまで考えてやっと思い至った。

まさか……………！？

そつ思つた瞬間、彼の視界に人影らしきものが入った。ただし……………

……………

サトシ「なっ……………だ、大丈夫ですか！？」

部屋の隅に、警備員らしき人物が倒れていた。

呼んでもゆすつても反応がない。気絶しているようだ。

サトシ「くっ……………！とりあえず救急車と警察を……………」

……………」

今が異常事態であることに気づいたサトシは自分の携帯に手を伸ばす……………が

サトシ「……………何で！？何でつながらないんだよ！？」

焦りとイラつきで思わず叫ぶ。何故か携帯が繋がらない。

ちくしょう……………！だから誰もいなかったのかよ！？

恐らくいなかったのではなく、見なかった。ここにいる警備員と同じく、皆気絶させられ、どこかへおいやられているのだ。

この分だと、監視カメラなどの警備システムも全く機能してないだろう……

サトシ「人を呼びに行くか……！？でも……その間に逃げられちまうかも……」

焦りだけがつのる………が、ふと、奥の曲がり角から人影が出てきたのが見えた。

サトシ「あ………待てっ！！！」

ほぼ反射的に体が動いた。向こうの人影もサトシに気づいたらしく、走り出した。

間違いない………泥棒だ！

ダダダダダダ！と、夜の美術館を走り回る。

身体能力には自信があったサトシだが、向こうも相当らしい。かなり早く、隙について死角に回り込まれてしまう。

サトシ「くっ………こうなったら！ピカチュウ！アイツに10万

……はマズいか。でんじはだ！！」

ピカチュウ「ピカッチュウッ！！」

ビシイ！と、夜の美術館に雷電が迸る………が

????「………！」

ヒョイツ

なんと犯人は、かなり速度があるはずの攻撃を、意図もたやすくか

わしてみせた。

サトシ「なっ……………!?!」

何だアイツ!?!あんなの俺でも難しいっての!
と負けず嫌いの彼は思ってしまう。普通はできないと思うんだけど
なあ……………。

サトシ「つくしょく!こうなったら挟み撃ち作戦だ!ピカチュウ!
こうそくいどうで前に回り込め!」

ピカチュウ「ピツカア!」

ビュンツ!と、凄まじいスピードで前へ突っ込むピカチュウ。

????「……………!」

ピカチュウがヤツを追い抜く!

そう思った瞬間、

ドカアツ!と、ピカチュウが不意に何者かに吹き飛ばされる。

サトシ「ピカチュウ!?!」

何とかピカチュウをキャッチするサトシ。幸い大したダメージでは
ないらしく、すぐに地面に飛び降りる。

サトシ「ってアイツは!?!」

慌てて周りを見渡すも、すでに犯人の姿はなかった。

サトシ「くそっ……………!逃げたか!?!」

ルカ（何故人が中に……………！？）

美術館・資料展示室奥。

そこでは先程の犯人…………ルカが何か手元の機器を操っている。
まあいい。任務には大して支障はない……………

カタカタカタカ……………ピピッ！…………カチャッ……………

どうやら保管ケースのロックを解除したようだ。

ギィ……………ケースを開け、中の物を取る。

ルカ（……………こんな物が……………神に近づく鍵になるとはな……………）

ソレをポーチにしまい込み、部屋を出ようと振り返った瞬間、

サトシ「見つけたぞー！」

ルカ「……………」

息を切らしながら、先ほどの少年と黄色いポケモンが入口に立っていた。

サトシ「そのポーチを渡せ！」

ルカ「……………」

何も言わない犯人……………

ん？よく見たらコイツ……………女か？

後ろで一つに束ねてある深い茶色の髪。

身体のラインがくつきり解る、ピチツつとした黒い特殊スーツ(?)

みたいなのに身を包んでいる。ほら……………キャツ アイみたいなあの

……………

等と考えていると……………

クルツと、ルカが後ろの窓の方へ向く！

その瞬間！

ビシイ！！と、窓が凍りつく。

ルカ「……………！！」

サトシ「っへ！お前の魂胆なんて見え見えだぜ。窓から逃げようとしたら冷凍ビームで凍らせるって、前もって指示を出したのさ！」

そう自信満々に叫ぶ少年の傍らにはオニゴーリが君臨している。

サトシ「さあ、もう逃げ場はないぞ泥棒！」

他に窓も無く、出口もひとつしかない。確かに逃げ場はなさそうだが、

ルカ「……………私が他に手をうつてないと思うか？」

サトシ「え？」

瞬間、

ピカチュウ「ピカピ……………」

バシィッ!!

サトシ「うわっ!?!」

間一髪、ピカチュウが後ろの気配に気づき、サトシに攻撃を加えられる前にアイアンテールで遮った。

マニョーラ「……………ニユ……………!!」

サトシ「マニョーラ!?! ……つて、あつ……………!?!」

だがその一瞬の間隙について、ルカがサトシとピカチュウとオニゴーリの間を縫うようにすり抜けていった。

サトシ「しま……………!! 待てっ!!!!」

必死に追うも、既に犯人は入口の手前まで迫っていた。

なんて速さだ……………

ルカが美術館の外へ出る。

が、

????「そこまでだ!!!!」

突然、サトシの聞き慣れた声が響いた。入口の方をしてみる。

ルカ「な……………!!?!」

タケシ「サトシ! 大丈夫か!?!」

カスミ「ったく、なかなか帰ってこないと思ったら……………やっぱり面倒に巻き込まれてんじゃない!」

ジュンサー「それを返しなさい！あなたを現行犯で逮捕します！」
そこにはタケシ、カスミ、そしてジュンサーら数人が立ちふさがっていた。

ジュンサー「包囲！」

ズカズカズカ！！

一瞬で数人の警官が犯人の周りを固めた。

ルカ「ぐ……………！？」

サトシ「な……………何で……………？」

一人だけ状況が掴めないサトシ。するとカスミがため息をはきながら説明を始めた。

カスミ「アンタがいつまでたっても帰ってこないから、心配になってアタシ達が探しに行ったら、美術館で倒れてる人を見つけたのよ。んで、ただ事じゃないと思って通報したの。」

サトシ「で、でも携帯繋がらなかったのに……………」
タケシ「確かに美術館の近くでは繋がらなかったが、少し離れれば問題なく通じたんだよ。」

ジュンサー「恐らく何らかの方法を使って、美術館付近にのみ妨害電波を張ったんでしょうね。周りに怪しまれないように。おまけに美術館の警備システムも全てハッキングされちゃ……………。サトシ君が引っ掻き回してくれなかったらきつと取り逃がしてたわ。」

サトシはポカーンとする。

ま、まあとりあえず……………結果オーライってやつ？

ルカ「く……………!!」
ジュンサー「確保っ!!」

警官達が一斉にルカに飛びかかる！
その瞬間！

ゴォ!!!!と、
辺りが一瞬で炎に包まれる。

ルカ「!!!？」
サトシ「つつつつ!!!？」
ジュンサー「キャッ……………!!!？」

炎が沈み、サトシ達の視界が回復する……………が、
そこにはもう既にルカの姿はなかった……………

ジュンサー「くっ!逃げられ……………!!!？」

そして、その代わりに……………

?????」……………」

バタバタ……………黒いローブがはためく……………

サトシ「……………え……………!!?」
カスミ「だ……………誰!？」

後ろから射し込む満月の光が、そのシルエットをかるうつじて浮かび
上がらせる……………

いつの間にか目の前の美術館の屋根の上には、漆黒の人物とポケモ

ンが立っていた……………

タケシ「敵の新手か……………！！にしても……………！！」

タケシは謎の人物の傍らに立つポケモンに目をやる。

ポケモン「……………」

既にブリーダーとしてはトップクラスの実力を持つタケシ。
だからこそ、わかる。

……………あのポケモン……………かなり育てられている……………！！
バックから射し込む月光のおかげでどのポケモンかまでは見分けられなかったが、発せられる雰囲気というか、気配といったものがそれを物語っていた。

ジュンサー「もしものために保険を掛けてたつてわけね……………！！こうなったらあなただけでも公務執行妨害で逮捕します！ウインディ！！」

ウインディ「ガウー！！」

サトシ「ピカチュウ！お前も行け！！」

カスミ「行きなさい！マイステディ！！」

タケシ「グレッグル！！」

ウインディ、ピカチュウ、スターミー、グレッグルが突撃する。
だが、

???? 『炎の渦。』

機械じみた、低い声が静かに響く。
その瞬間、

ゴオオ！！と、またもや炎の竜巻がサトシ達を襲う。

サトシ「うわっ！？」

ポケモン達も、その凄まじい熱風の前に成す術もなく立ち止まってしまう。

ゴオオオオ……………燃え盛る炎。

その向こうにたたずむ漆黒の人物を、サトシは何とか視界に入れる。

サトシ「く……………！お前は…一体……………」

「何者だ！？」と言葉を続けようとするサトシ……………が、

????……………」

ギン……………」

サトシ「ウツ……………！？」

ゴオオオ……………」

炎の熱気でその姿が揺らいでいる……………」

顔は頭からかぶったフードの闇で見えないのだが、何故か一瞬睨まれた気がした。

????……………」

瞬間、

フツ……………と、

漆黒の人物とそのポケモンは……………その場から消えた……………」

……………」

ジュンサー「あっ……し、しまった!!」
カスミ「逃げられたわね……」

炎は既におさまっており、まるで何事も無かったかの様に、辺りに再び夜の静寂が戻る。

ジュンサー「まだ近くにいるかもしれない!すぐに防衛線を張って!」

ジュンサーが部下の警官達に指示を送った。
警官達が慌ただしく動いている……

タケシ「何だったんだアイツは……」

そんな中サトシ達はしばらく呆気にとられていた……が、

サトシ「……」

タケシ「……?サトシ……?」

サトシはしばらく美術館の屋根の上を睨んでいた。

……何だ……?何か知らないけど……

サトシ「……めっちゃくちゃ悔しい。」

タケシ「まあ、逃がしちゃったしな。」

サトシ「それもあるけど……何か……バカにされたって言うか……」

カスミ「は?」

「何言ってるのこイツ?」といった風な顔でサトシを見るカスミ。

サトシ「……後一步の所まで追いつめたのに、後から来た訳わかんないヤツに邪魔されて……、で、何もできないまま結局どっちにも逃げられて……」

何より、あの時一瞬でも怯んでしまったのが悔しい。あの時の自分はまさに、「蛇に睨まれた蛙」状態だった。

サトシ「……我ながらみっともないぜ……」。

グ……と、サトシは拳を握りしめた……

異変……………そして意外!?

ザワザワザワ……………

風で木々が揺れる音が静かに響く……………

この時期にしては珍しい程の日射しも、生い茂る枝葉によって遮られあまり気にならない。

ここは一言でいうと、森だ。

樹齢千年を超えるであろう巨大な樹木。あまりにも透き通った川。

まるで違う世界にでもいるかのような錯覚を覚える程の、広大無辺な場所。

そしてそんな中、明らかに浮いている人物が一人……………

ハルカ「ふう。これくらいにしとこうか……………。」

コンテストも休み、ただいま音信不通状態のハルカがポケモン達に言う。

その言葉にバシャーモ等ハルカの手持ち達は技の構えを解き、主人の元へ集まった。

ハルカ「みんなお疲れ様。はい、ご褒美。」

そう微笑みながらポロツクをポケモン達に与える。ポリポリと、嬉しそうに食べているバシャーモ達。

ハルカはその光景を見ながらしばし物思いにふけた。

……………しばらくコンテストも出てないなあ……………きつと腕も鈍ってるかも……………

シユウやサオリさん……………ハーリーさん……………ヒカリにもサトシとかにも最近会ってないし……………

ハルカ「……………サトシ……………か……………」

ハルカの脳裏にかつてハウエン、カントーを共に旅した帽子の少年が浮かぶ。

もしサトシに会っていないかったら……………きっと自分はコーディネーターにはなっていないかっただろう……………。それどころかポケモン達と触れ合う事もなかったかもしれない……………。

ハルカ（……………今じゃ信じられないかも。）

もしもの事を考えると急におかしくなって思わず笑ってしまうハルカ。……………だがすぐに、ハア……………とため息をつく。

……………会いたいなあ……………皆に……………

それに……………答えも出さないと……………

ふと、そんな事を思う。だがまたすぐに気を切り替え、

ハルカ（ダメダメ！私は強くなるって決めたんだから……………！それまでは余計な事考えちゃダメ！我慢よ我慢……………！）
バシャーモ「シャモシャ……………？」

しばらく黙り込んでいたハルカを心配してか、バシャーモがかがんでのぞき込んできた。

見るともつ全員がすでにポロツクを食べ終えてハルカの方を見ていた。

ハルカ「ああゴメンゴメン！何でもないので！ちょっと考え事してただけかも。」

ハルカは慌てて表情を直した。今私どんな顔してたんだろ……………？

ハルカ「っっていうか遅いなああの人……………」

ハルカは今ある人と待ち合わせをしていた。

普通はこんな所で人と待ち合わせなどしないだろうが、ハルカはコ―ディネーターとして大分顔が知られてしまっているため、人とゆつくり話したい時はこういった人気の無い所の方が良かったのだ。それでも極端な気はするけど……………。

しかし肝心の相手がなかなか来ない……………。また特訓再開しようかな？…………いや、自分もポケモン達もお腹すいてきたし……………

ハルカ「うゝん……………しょうがないから先にお昼にしちゃ……………」

???「よお！待たせちゃったかい？」

ハルカ「！……………いきなり背後から現れるのはやめてもらえますか……………」

いつの間にやらハルカの後ろにはニヤニヤ顔を浮かべた金髪の男が立っていた。ハルカが待っていた人物だ。

一言でいうと……………チャライ。

と言っても服装や見た目などはそんなでもないのだが、しゃべり方とか雰囲気チャライ。

???「そんな顔すんなよおゝ！別にやましい事は考えてねえんだし。ま、もうちょいしたら考える予定なんで、よろしくな。」

ハルカ「何が？」

ハルカはこの男に会ってから浮かべている呆れ顔をさらに強く浮かべた。

確かにイケメンだけど……………中身とのギャップありすぎかも……………

……………同じイケメンならやっぱりシュウの方が……………
だがハルカはそこで考えるのをやめ、はかば強引に話を切り替えた。

ハルカ「ツツツ……………もうっ！それより本題に入りましょーよ本題に！私は忙しいんですっ！！」

「？？？「なーにが忙しいだよ話変える口実のくせにい。お前は今で言うアレだ……………ツンデレだな！」

ハルカ「……………川に沈めてやろうかしら。」

「？？？「わ、わかった……………！わかったから真顔でポケモンつれてくるのはやめろ！！」

ギヤーギヤー響き渡る声は、神秘的な場所にいるこの二人をさらに浮かび上がらせていた……………。

タマムシシティ・ポケモンセンター。

サトシ達はポケモンセンターの食堂で朝食をとっていた。備え付けのTVでは朝のニュース番組が流れている。

キャスター「では次のニュースです。最近深刻化している各地の干ばつ被害について、政府は昨日、特別対策案をまとめる方針を伝えました。この特別対策案は……………」

タケシ「干ばつか……………。温暖化というやつか？」

カスミ「水ポケモン達への影響が心配ね……………」

広範囲に及ぶ原因不明の干ばつ被害。

数年前から目立った被害が出始め、各地の人々は言い知れぬ不安にかられていた。

サトシ「……何か、あの時を思い出すな……………」
タケシ「あの時？」

サトシ「ほら……………ハウエンのグラードンとカイオーガの戦い。」

カスミ「ああ、アレね。私もテレビで見たわ。凄かったらしいわね……………」

サトシはかつて関わった伝説ポケモンの戦いを思い出す。

大陸ポケモン、グラードン。そして海底ポケモン、カイオーガ。約六年前、サトシ達はその二匹を手中におさめ世界征服をもくろんでいた組織、マグマ団とアクア団に遭遇した。

しかしどちらもグラードンとカイオーガの人智を超えた力に愕然とし、結局その二匹を操ることを諦め解散。彼らの野望は泡と消えた。

サトシ「……あの時はカイオーガが暴走して大雨降らせて大変だったけど……………今度は干ばつか……………」

カスミ「……まさかまたマグマ団とかいう奴らが復活して……………？」

タケシ「いや、それはないだろう。奴らは完全にグラードンとカイオーガを操るのを諦めていた。」

サトシ達がそんな事を考えていると、番組のニュースが切り替わった。

キャスター「次のニュースです。先日カントー地方のタمامシシティ・タمامシ美術館で強盗事件が発生し、古代ポケモンに関わる資料一点が盗まれました。タمامシ美術館はカントーでは随一の規模を誇り……………」

サトシ「あ、美術館映ってる。」

テレビにはタمامシ美術館の前でインタビューを受ける美術館の館長が映し出されている。

館長「あれは先日見つけたばかりで、研究が進めば新たなポケモンの存在が判明するかもしれないとても貴重な物でした……。一刻も早く……」

タケシ「そんな貴重な物を盗まれたのか……。」

カスミ「あれから何日か経ったけど、結局何も掴めてないってジュンサーさん言ってたわね……。」

サトシ「しっかし何でこう俺達は毎度面倒に巻き込まれるんだ？」

カスミ「達じゃなくて「俺」ね「俺」。」

サトシ「まるで俺が面倒持ち込んできたみたいない言い方だな……」

カスミ「そう言ったんだけど？」

サトシは何やらブツブツと文句を言いながら食堂のカウンターへ食器を下げに行った。すると、

ブーツ……ブーツ……と、彼の携帯が震えた。

サトシ「ん？メール……誰だ……？」

ディスプレイには「ヒカリ」と記されていた。

ヒカリ

サトシ久しぶり〜！元気してた！？

何でいきなりメールしたかというところ……何とあかし、今カントー

にいるのでーす！ノゾミも一緒だよ）＊

それで久しぶりに会えないかなと思ってメールしました！

お返事待ってまゝす！

思わずサトシの顔がほころんだ。

午前11時

ヤマブキシテイの公園。

ヒカリ「サトシィ〜！タケシィ〜！」

噴水の向こう側からニット帽をかぶったヒカリが走ってくる。その少し後をノゾミがゆっくり歩いている。

サトシ「おおヒカリ！久しぶりだなあ！ノゾミも大きくなったな〜！」

ノゾミ「アタシは子供かい……………」

サトシ達は断る理由も無いので、後日ヒカリ達と公園で待ち合わせ、て久しぶりに遊ぼうということになった。

ヒカリ「あっ！カスミさん直接会うのは初めてですよね！？わたしヒカリです！こっちは友達兼ライバルのノゾミ！よろしくお願いしますまゝす！」

ノゾミ「よろしく。カスミさんはジムリーダーなんだよね？今度バトルしたいな。」

カスミ「よろしくね。それと二人とも、アタシのことはカスミで良いから。さん付けてちよっと苦手なのよね〜。」

ヒカリ「じゃあカスミは彼氏いるの!？」

カスミ「ヒカリ……………何が「じゃあ」なのかしら……………」

楽しそうに話すガールズ三人に軽く嫉妬(?)したサトシはすかさず話題を振った。

サトシ「でも二人とも何でカントーに？」

ヒカリ「ふっふっふ。それはね……………」

「アレ!」と指差しながらヒカリは言う。その先を見てみると、何やらデパートにポスターが張ってあるのが見えた。どうやらコンテストの張り紙らしい。

ヒカリ「明後日に開かれるこのコンテストに出るために来たの。でもただのコンテストじゃないのよ?何とあのミクリ様が主催者として審査員に加わるんですって!」

やや興奮気味にヒカリが説明する。へえ、前にシンオウでやったミクリカップみたいなものか……………しかし以外にもカスミがこの話に食いついてきた。

カスミ「えっ!?ミクリさんここに来るの!?!えっ…………マジ!?!」
タケシ「ずいぶん嬉しそうだな。」
カスミ「そりゃそうよ!だってアタシ、ミクリさんの大ファンだもの!?!」

サトシ「そうだったのか。まあミクリさんと言えば、ホウエンの「チャンピオン」にして、「コンテストマスター」にして、「水ポケモンマスター」の超スーパーな人だもんな。」

おまけに超イケメンだし。全国の女性の憧れの的であるとともに、

全国の男性の嫉妬の対象……なんだろうな……。まさに「全てを持っている男」。それがミクリなのだ。

カスミ「決めた！私もそのコンテスト出るわ！！」

サトシ「へえ〜そうなんだ………っては？」

カスミ「だから！私もヒカリ達と一緒にこのコンテスト出るって言ってんの！」

シン………一瞬の沈黙………

サトシ「ええええええええええ！！！！？？カ、カスミがコンテストだとおおおおお！？」

突然のカスミの宣言に流石のヒカリとノゾミも目を見開いている。

タケシ「おいおい本気かカスミ？これにはヒカリもノゾミも出るんだぞ？熟練の二人相手にシロウト同然のお前に勝ち目は……」

カスミ「勝敗はどーでも良いのっ！とにかくこれは、憧れのミクリさんにアタシの存在をアピールするチャンスよ！！」

サトシ「アピールしすぎて逆に引かれるんじゃないか……ぐふっ！？」

カスミのハイキックがサトシの腰にクリーンヒットした。効果は抜群だ。

カスミ「さあて、そうと決まればさっそくコンテストパスの発行よ！ヒカリ！ノゾミ！パスの作り方教えて！」

ヒカリ&ノゾミ「ハ…ハイイ！！」

サトシが撃沈されるのを目の前で見ていた二人は、冷や汗をかきな

がら元気に返事をする。

カスミ等二人は物凄い勢いでその場を離れて行った……………。

タケシ「…………こりゃ面白い事になりそうだなサトシ。お前も出てみたらどうだ？」

サトシは先程のダメージに未だうずくまっていたままだ。

サトシ「絶対イヤだね…………。アイツより目立ったら俺もつ多分この世にいない……………」

ハア……………一体どうなることやら……………。

失礼のないように

ヤマブキシテイ・コンテスト会場前

カスミ「コンテストパスも作ったし、エントリーも完了！これで準備万端ね！」

コンテスト当日。

エントリーを終えたヒカリ、ノゾミ、そしてカスミが会場の受付から戻ってきた。

会場前の広場にはエントリーを終えた人や観客がすでに集まりはじめている。今回はミクリが主催者および審査員を勤めるとだけあって、出場者も観客もすごい数だ。

サトシ「なあおい、マジで出んのかカスミ？」

カスミ「文句あんの？」

サトシ「いえ、ありません……………」。

コンテスト開始約2時間前。

さっきからこの様なやり取りが続いている……………。

タケシ「それにしても、今回はミクリさんが審査員を務めるだけあって周りも気合い十分って感じだな。」

サトシ「ああ。みんな燃えてるな！」

ヒカリ「ノゾミ！絶対負けなからね！」

ノゾミ「ああ。でもリボンは私がもらうよ？」

サトシ「おおっ、こっちも燃えてるな！」

カスミ「ミクリ様！必ずあなたを振り向かせて見せます！！！」

違う意味で燃えてる人一名……………

タケシ「まあカスミはともかく、ここにハルカが居れば、シンオウのミクリカップの完全再現になったんだけどな。」

サトシ「そっぴやそっぴだな。」

ミクリカップか……………懐かしいな……………

ハルカとヒカリのバトル……………俺は結局最後までどっちを応援するか決められなかったんだっけ……………

でもアイツは……………

サトシ「……………ん？あれは……………」

タケシ「どうしたサトシ？」

サトシの視線の先に目を向けるタケシ。そこには何やら沢山の人だかりができていた（といっても殆どが女の子だった）。よく聞いていると「キャー！ウソ本物！？」とか、「かつこいい〜！こつち向いて〜シユウ様あ〜！」などと女の子達の悲鳴に近い声が聞こえてくる。

……………ん？シユウ様……………？

シユウ「ありがとうございます。ハイ、これで良いかな？」

ファン「あ、ああああありがとうございます！！」

差し出された色紙にサインして女の子に返す美少年。

その人だかりの中心にはまさしく、笑顔でファンの女の子達に心えているシユウの姿があった。

タケシ「何でアイツばかりいつもモテるんだ……………」

サトシ「まあ生まれ持った才能の差じゃね？お〜いシユウ〜！！」

タケシを適当にあしらいシュウを呼ぶサトシ。シュウはその声に気づき、ファン達に「また今度ね」と一言そえてこちらに歩いてきた。

シュウ「やあ。久しぶりだね。」

サトシ「久しぶりだな。元気だったか？」

シュウ「ああ。この通り。」

ファン達はシュウとサトシ達が親しげに話す所を見てバツの悪そうな顔をして離れていった……………。

シュウ「…と、そちらはヒカリさんとノゾミさん、それにハナダジムのジムリーダーのカスミさんだね。初めまして。シュウと申します。」

そう言つて微笑みながら会釈するシュウ。その瞬間周りから「ハウッ！」という女の子らしき声が聞こえたとか……………。

カスミ「カスミよ。よろし……………」

ヒカリがいきなりカスミを押しつけて前へ出る。

ヒカリ「は、ははははは初めまして！シュウさんですよね！？」

シュウ「ああ。そうだけど……………」

ヒカリ「わ、わわ…………わたし、ヒカリと言っています！よ、よろしくお願いします！」

サトシ「おいおいヒカリ何だそのテンパリ振りは？」

ヒカリ「だ、だってシュウさんと言ったらコンテスト界では知らない人がいないくらい超有名人じゃない！！ってかサトシ、シュウさんと知り合いだったの！？何で教えてくれなかったのよ〜！」

サトシ「何でって言われても……。」

興奮するヒカリをよそに、今度はノゾミが前に出てシュウに握手を求めた。

ノゾミ「ノゾミと言います。会えて光栄ですシュウさん。」

シュウ「よろしく。そう言ってもらえると嬉しいよ。」

そう言って握手をするノゾミとシュウ。

サトシ「お前もこのコンテストに出るのか？」

ヒカリ「サ……サトシ、シュウさんに何て口の聞き方……。」

シュウ「いや、僕は今回は出ないが、ミクリさんが主催するコンテストだからね。観戦に来たと言っわけさ。」

サトシ「へえ、珍しいな。お前が出ないなんて。」

シュウは何故か一瞬表情が暗くなったがすぐに笑顔で、

シュウ「フツ……。たまには観戦でもして色々学ぼうかと思っただけさ。」

サトシ「ふうん。良かったなあカスミ。強敵が一人減って。」

サトシがふざけてカスミに言う。その瞬間カスミはサトシを思い切り睨みつけた……。

シュウ「ん？カスミさんもコンテストに？」

カスミ「まあね。でも私の目的はあくまでミクリさんだけだ。」

シュウ「……………そうなんですか。観客席から応援しています。それじゃ僕はこれで。」

と、シュウがいつものように左手をポケットに突っ込み、右手を上げながら背を向けて立ち去ろうとした………が、

サトシ「そっぴやシュウ。ハルカの事聞いたか？」

サトシがシュウを呼び止めた。

シュウは一瞬ピクツと動いて、

シュウ「………ああ。何でも集中特訓しているらしいね。」

いつもより少しだけ低い声で答えた。

サトシ「らしいな。しっかしアイツも良くやるよなあ。コンテスとも休んで、しかも周囲を完全シャットアウトしてだぜ？」

シュウは黙って聞いている。

サトシ「俺でもそんなんやったことねえっての。ったくいつまで潜ってるつもりなんだか。」

シュウ「ああ………そうだね………。」

シュウの様子には目もくれず一人話し続けるサトシ。

サトシ「ま、でも出てくるのが楽しみだけどな！そしたら即バトル申し込んで………」

シュウ「すまない急いでるんだ。じゃ。」

シュウは突然サトシの言葉を遮り、そのまま去って行ってしまった

………。
サトシは怪訝な顔をしながらシュウの背中を見る。

サトシ「……？なーんだアイツ？観戦するなら一緒に行こうと思っ
てたのに……………」
タケシ「確かに少し様子が変わったな……………」
カスミ「わかってないわねえ〜あんたら。」

カスミが得意げに二人に言う。

サトシ「は？どういうことだよ？」

カスミ「まあアンタに説明してもわかんないでしょうね。」

ヒカリ「えっ？まさかカスミ……………ええ!？」

ノゾミ「へえ。まさかあの二人がねえ〜。」

ヒカリとノゾミはカスミが言わんとしている事に気がついたようで、
ノゾミに至ってはニンマリしている。

サトシ「なんだよ……………。俺だけカヤの外かよ……………」

ヒカリ「ああ〜シユウさんにサインもらえば良かったあ〜……………」

ノゾミ「追いかければまだ間に合うんじゃない？」

ヒカリ「いや……………今の空気がじゃ行きづらいつて……………」

カスミ「でもこれは面白いドラマが見れそうねえ〜。」

カスミがサトシを横目で見ながら誰にも聞こえないように呟いた。

タケシ「つと三人とも、コンテストの事忘れてないか？」

ヒカリ「あ！もうこんな時間!？最後の調整しなきゃ!！」

ノゾミ「突然のイベントにすっかりしてたね……………」

カスミ「そうだ！アタシもミクリさんにアピールしなきゃいけない
んだっ!！」

そう言ってヒカリ、ノゾミ、カスミの三人は広場の方へ散らばっていった……………

タケシ「じゃあ俺達も会場に入るか。」

サトシ「そうだな。にしてもカスミのヤツ、俺を子供扱いしやがって……………」

サトシは何やらブツブツ文句をたれながらも会場内へ入っていく。

タケシ（……………さくってサトシ、いよいよ本気でウカウカしてられないぞ？）

タケシもまたサトシの後を追って会場内へと向かった……………。

シユウはコンテスト会場には入らず、一人道端を歩いていた。

13時45分……………あと15分程でコンテストが始まる。そろそろ戻らなくては……………

しかし、シユウの足取りは重い。

さっきは適当な事を言って何とか誤魔化した……………いや、嘘ではなかったのかもしれないが……………

シユウはこれまでコンテストというコンテストには積極的に出場していた。しかし最近は全く出ていないという訳ではないのだが、その頻度は落ちていた。

別にコンテストが嫌いになった訳でも、スランプに陥っている訳でもない。

ただ………どうにもコンテスト会場を前にするとハルカの事を
思い出してしまう。

少し前までであれば特段それは問題ではなかったのだが………

……

数ヶ月前、ハルカから突然きた電話。

シュウ「修行？」

ハルカ「うん。しばらくコンテストも休むわ。それと多分、連絡も
あまり取れなくなると思う。」

シュウ「それは随時な力の入れようだね。」

ハルカ「まあね。今の自分のままじゃ駄目だと思って。だからちょ
つとの間音信不通になると思うけど、心配しないでね。」

電話越しのハルカの声はどこか寂しそうで、しかし決意に満ちたも
のだった。

シュウ「わかった。ちゃんと三食とるんだよ？」

ハルカ「だ、だから心配しないでってば！ってゆーか子供扱いしな
いでほしいかも！」

シュウ「ハハハ。冗談さ。」

ハルカ「……それと………この前の事なんだけど………
……」

さっきまでの勢いはどこへやら。ハルカは急にモゴモゴと言いつつ
そうに口ごもった。

シュウ「……いいよ。」

ハルカ「え？」

シュウ「急いで答えを出さなくてもいいってことさ。じっくり考えて答えてもらわないと意味はないからね。」

もうわかると思うが、先日シュウはハルカに思い切って告白した。しかしハルカはまだ戸惑っていた様で、すぐに返事をくれなかった。そして今の状況に至る。

ハルカ「で、でも……さっきも言ったけど、私これからしばらく……」

シュウ「待つよ。それからでも構わない。君がちゃんと答えを見つけてくれるまで、僕は待つから。」

そう。どんな答えでも……ね……

ハルカ「……わかったわ。そういう事なら……今は……」

シュウ「ああ。じっくり考えてくれ。」

そうは言ったものの……あれからはや3ヶ月。どうにも気になってコンテストにも集中できない。シュウにとっては一大決心の告白だったのでなおさらだ。

何度も電話してみようという衝動にかられたが、あの時の真剣なハルカの声を思い出し、邪魔してはいけないとなんとか我慢した。

今日ここに来たのだって、もしかしたら彼女もこのコンテストに出場しているかもしれないという希望があったからだ。

シュウ「ふう……。そろそろ僕も気持ちを切り替えないと……。」

ワアアアアアアア……

会場から歓声らしきものが聞こえてくる……………コンテスト
が始まったのだろう。

シユウ「……………」

『待っててシユウ。必ずもっともって強くなって戻ってくるから！』

シユウ（……………僕も頑張らないと、君が強くなって戻ってきた時、
失礼だからね。）

フツ……………と、不敵に笑う。

そして……………例えどんな答えでも……………僕は誠心誠意、君の想いを
受け止めるよ……………

シユウはゆっくりと会場へ向かって歩き出した……………

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6645z/>

ポケモンヒストリー

2011年12月29日16時49分発行